

鞆らしくない鞆

海野十三

青空文庫

事件引継簿^{ひきつぎぼ}

或る冬の朝のことであつた。

重い鉄材とセメントのブロックである警視庁の建物は、昨夜来の寒波^{かんば}のためにすっかり冷え切つていて、^{はやとうちよう}早登庁の課員の靴の裏にうってつけてある鋷^{びよう}が床にびつたり凍^{こお}りついてしまつて、無理に放せば氷を踏んだときのようにジワリと音がするのであつた。朝日は、今ようやく向いの建物の頭を掠^{かす}めて、低いそしてほの温い日ざしを、南向きの厚い硝子^{ガラス}の入つた窓越しにこの部屋へ

注入して来た。

そのとき出入口の重い扉がぎいと内側に開いて、肥えた赭ら顔の紳士が、折靴を片手にぶら下げて入って来た。

課員たちは一せいに立上って、その紳士に向って朝の挨拶をのべた。みんなの口から一せいに白い息がはきだされて、部屋の方々に小さな虹が懸った。紳士は一番奥まで行って、まだ誰も座っていない一番大きな机の上に靴をぽんと投げ出し、それから後を向いて帽子掛に、鼠色の中折帽子をかけ、それから頸から白いマフラーをとってから、最後に鼠色の厚いオーバアを脱いで引懸けた。それから身体をひねって、大机にくつついている回転椅子をすこし後にずらせて、その上に大きな尻を落着かせたので

あつた。かくして警視田鍋良平氏は、例日の如くちやんと課長席におさまつたのである。

少女の給仕が、縁ふちのかけた大湯呑おおゆのみに、げんのしようこを煎せんじた代用茶を入れてほのぼのと湯気だつたのを盆にのせ、それを目よりも上に高く捧げて持つて来た。課長は彼女がその湯呑を、いつもと同じに、硯すずりばこ箱みけつきけつと未決既決の書類函ばことの中間に置き終るまで、じつと見つめていた。

少女の給仕が、振分け髪おんの先つぽに、猫じやらしのように結んだ赤いリボンおんをゆらゆらふりながら、戸口近い彼女の席の方へ帰つて行くのを見送つていた田鍋課長は、突然竹法螺たけほらのような声を放つて、誰にいうともなく、

「あーア、昨夜から、何か変ったことはなかつたかア」

と、顔を正面に切つていった。そして手を延ばして大湯呑をつかむと、湯気のとつやつを唇へ持つていった。破れ障子に強い風が当たつたような音をたてて彼は極く熱つのげんのしようこを啜つた。近来手強い事件がないせいか、どうも腸の工合がよろしくない。

ばたと机に音がして黒表紙の帳簿が課長の前に置かれた。

「事件引継簿第七十六号」と題名がうつてある。課長は大湯呑

を左手に移し、右手の太い指を延ばして帳簿の天頂から長くは

み出している仕切紙をたよりにして帳簿のまん中ほどをぼんと開いた。その頁には、昨日の日附と夕刻の数字とが欄外に書きこ

んであり、本欄の各項はそれぞれ小さい文字で埋^{うま}っていた。

“——省線山手線内廻り線の池袋駅寄り電車が、同駅ホーム停車中、四輛目客車内に、人事不省^{じんじふせい}の青年（男）と、その所持品らしき鞆（スーツケースと呼ばれる種類のもの）の残留せるを発見し届出あり、目白署に保護保管中なり。住所姓名年齢不詳^{ふしょう}なるも、その推定年齢は二十五歳前後、人相服装は左の如し……”

課長はそのあとの文字を、目で一はけ、さつと掃^はいただけでやめ太い指で紙をつまんで、次の頁をめくった。

次の頁は空^{ブランク}白^クだった。

（さっぱり商売にならんねえ）

と、課長は、刑事時代からの口癖になっている言葉を、口の中

でいってみた。ぽたりと微かすかな音がした。茶色の液えきの玉が空白の頁の上に盛上つて一つ。課長は大湯呑を目よりも上にあげて、湯呑の尻を観察した。それからその尻を太い指でそつと撫なでてみた。指先は茶色の液ですこし濡ぬれた。課長はすこし周章あわてて茶碗を下に置きかけたが、机に貼りつめている緑色の羅紗ラシヤの上へ置きかけて急にそれをやめ、大湯呑は硯すずり箱ばこの蓋の上に置かれた。

課長の仕事は、まだ終っていなかった。事件引継簿の頁の上にはげんのしようこの液の玉が盛上っていた。課長は、机の引出から赤い吸取紙を出して、茶色の水玉の上に置いた。吸取紙は丸く濡れた。その吸取紙を課長が取ってみると、帳簿の上の水玉は跡あとかた片なく消え失せていた。課長の当面の仕事は終わった。

おれの次の仕事は、何時になつたら出来てくるのであろうか――と、課長は背のびをしながら、両手を頭の後に組んだ。

失^{しつ}踪^{そう}の博士

いつもなら、そういう面会人は必ず応接室へ入れるのが例になつていたが、今日ばかりは特別の扱いで、課長はいそいそと席から立って指^{さし}図^ずをし、その面会人を自分の机の横の席へ通させたのである。ちようどその日のお昼前のことであつた。

面会人は白井藤吾うすいという姓名の青年であり、この白井青年を紹介して来たのは、課長と同郷の大先輩である元知事目賀野めがの俊道氏であつた。しかし課長は、この大先輩に対し、あまり尊敬の念を持合わしてはいなかつた。

「実は重大人物が行方不明となりましたものですから、特に課長さんの御尽力ごじんりよくに縋すがりたいと存じまして、目賀野閣下かつかから紹介して頂いたような次第でございます」

青年白井は、ポマードで固めた長髪を奇妙に振りながら、近頃の青年にしては珍らしく鄭重ていちょうな言葉で挨拶をしたのだつた。青年の赤いネクタイが、その睡眠不足らしい腫れはぼつたいまぶた瞼や、かさかさに乾いた黄色っぽい顔面とが不釣合に見えた。

（目賀野氏はもはや閣下ではない筈ですが……）と皮肉をいつてやりたくなつた田鍋課長だつたけれど、それは差控さしひかえることにして、

「どういふ人物だか、詳しくお話下さらんで、われわれには正体が分りませんが、とにかく家出人の捜査申請そうさしんせいは本庁でも毎日受付けて居りますから、どうぞ届書とどけしょを出されたい」

と返答をした。

「いや、これは失礼をいたしました。故意にその人物の素性すじょうなどを隠そうとしたものではなく、その人物が如何なる人であるかを説明するには相当長い説明が要いりますので、とりあえず重大人物と申上げたわけでありますが……」

「お話中ですが、われわれは非常に多忙でありますし、且かつまた非常に重大事件を数多抱えて居りますために、なるべくつまらんことでわれわれをわずら煩わさないように願いたい。いやもちろん目賀野先生の紹介状に対して敬意を表しないというわけではありませんが、とにかく本課では目下数多の重大事件を抱えこんでいる——今も申した通りですが、例えば某研究所から二百グラムというおびただ夥しいラジウムが盗難に遭い目下重大問題を惹じやつ起して、本課は全力をあげて約四十日間そうさく捜索を継続してはいますが、今以て何の手懸りもない——迷めいきゆう宮入り事件くさいですがね、これは……、それだとか次は……」

「お話中を恐れ入りますが、他の重大事件には私は殆んど関心を

持つて居りませんので。はい、ただただ只々重大人物博士の失踪しつそうについて非常なる憂慮ゆうりよと不安と焦燥しやうそうとを覚えている次第でございます

「失踪事件ならば、先刻も御教えしたとおり家出人捜査申請しんせいをせられたい」

「それは分つて居ります。しかしですな、その博士はあまりに重大なる人物でありまして、普通の失踪捜査申請などをしていたのでは間に合わないのございます。況んや博士おいに於ては家出せられるほどの事情は痕跡こんせきほども持つて居られない。従つてこれは博士を誘拐ゆうかいしたと見なければならぬはなは甚だ重大刑事事件であります。果して然らばしか、刑事部捜査課長たる足下そつかが当然陣頭に立つ

て捜査せらるべき筋合のものであると確信いたします」

「いったい一体誰ですか、その重大人物博士とやらいうのは……」

「あかみざわ赤見沢博士のことです。あの有名な実験物理学の権威、そし

て赤見沢ラボラトリーの所長、万ばんこく国学士院会員、それから……

いや、後は省略しましょう。ここまで申せば、課長さんも赤見沢

博士の重大人物たることをよく御ごりようかい了解になるでしょう」

「もちろんです」課長は勢い上、そう応こたえなければならなかつた。

「赤見沢先生が失踪されたとは、これは初耳ですな。それは何いつ時

のことですか」

「昨夜以来、お邸やしきへお帰りが無い。お邸と申しましても、それは

ラボラトリーの一室ですが……。私は昨夜はお目に懸かかる約束にな

つていたので博士の御帰りを待つて居りましたが、遂に博士はお
帰りにならず、本日午前十時になつても姿をお現わしになりませ
ん。それ故にこれは大變だと思ひ——今までそんな約束ちがいは
一度もありませんでしたからな——それで目賀野閣下に御相談を
し、こちらへ駈付けましたような訳です。如何です。昨夜何か都
下において血ちなまぐさ腥かけつき事件でもございませんでしたでしょうか」

臼井は錐きりのように鋭く問い迫る。

「昨夜は極きわめて静せい穩おんでしたな。報告するほどの事件は一つもな
かつた。いや、正確に申せば只一件だけあつた。深夜池袋しんや駅停どまり
の省線電車の中に、人事不省になつた一人の男が鞆と共に残つて
いたというだけのことです」

「えつ、鞆と仰おっしや有あいましたか」

「ああ、鞆——それはスーツケースらしいですが、それが車内に残留していたので、その人事不省の人物の所持品じやろうと……」
 「その人事不省の男というのは、どんな男でしたか。年齢はどのくらい……」

「二十五前後の青年男子だと報告して来ています」

「ああ、それじゃ違う。赤見沢博士は確たしか本年六十五歳になられる老ろうたい体たいなんですからね」

「それはお気の毒」

と課長はいつて、事件引継簿を書類函ぼこの既決きけつの函の中へ、ばさりと投げ入れた。

仔猫こねこの怪かい

面会人白井は、なかなか尻を上げようとはしなかった。

「これは一つ、今日只今課長さんによく認識して頂かねば、僕は帰れません。そもそも赤見沢博士の重大性なるものは……」

「粗茶そちやですが、どうぞ」

少女の給仕が茶を入れて持って来て、白井の前に置き課長の大湯呑にはげんのしょうこをつぎ足して来た、課長は客に粗茶をど

うぞと薦め^{すす}たわけだ。

「ああ結構です」と臼井は香のない茶に咽喉^{のど}を湿^{しめ}し、「早く分つて頂^{たま}くために、そうですねあ、ああそうだ、仔猫^{こねこ}のお話をしまし
よう」

「仔猫？」

「そうですね。猫の子ですなあ」

課長の前の既決書類函から書類を取出していた少女の給仕は、猫の子問答のおかしさに耐^たえられなくなって、書類を抱^かえると大急ぎで後向きになって、すたすたと戸口の方へ駆出^{かけだ}した。

「猫の子がどうしたというんです」

「課長さん。僕が博士を始めて訪問したときに、その部屋に仔猫

がいたんです。僕はびっくりして腰を抜かしそうになりました」

「君はよほど猫ぎらいと見える。ははは」

「いや違う。総じて猫というものは僕は大好きなんです。だから普通では猫ねこまた又を見ようが腰を抜かす筈がない。だからそのときは愕おどろきましたよ、実に……なぜといってその仔猫がですね、宙ちゆうにふらふら浮いているじゃないですか、びっくりしましたね」

「どうしてまたその仔猫は宙に浮いていたのですか。天てんじよう 井 井 井
ら紐ひもでぶら下げてでもあったのですか」

「そんなことなら、僕はきやツなどと恥はずかしい声を出しやしません。その仔猫たるや、紐でぶら下げられたのでもなく、風船で吊つ上げりあられているのでもなく、宙にふわふわと……」

「それは本当の猫じゃないのでしよう」

「本当の猫です。あとで僕はさわってみましたから、知っています。もつともこの仔猫は赤い腹掛はらかけをしていましたかね」

「腹掛のせいじゃないでしょう、宙をふわふわやるのは……」

「さあどうですかなあ。とにかく赤見沢博士という大学者は仔猫を宙に浮かせるような奇妙な実験をしてみせる、恐るべき人物です」

「それは魔法かな、奇術きじゆつかな」

「奇術でしょうな。博士はそのときいつていました。これは正しい学理に基づく一つの実験なんだ。決してこの猫は化け猫ではないと説明されたんです」

「君はその種を知っているのでしょうか。さあ聞かせて下さい」

田鍋課長は、先^{せん}刻^{こく}とすっかり立場をかえ、白井の語るのを催^さ促^{そく}した。

「僕には分かりません」白井はそういった。本当に知らないのか、それともわざと説明を逃げたのか分かりかねる。「とにかくそういう重要人物なんですから、ぜひとも一刻も早く赤見沢博士を探し出して頂きたい」

「うーむ」

課長は呻^{うな}った。わが命令を出すのは極めて容易^{ようい}であるが、そういう奇術師だか理学者だか分らない変な人物を探し出すのに大掛りなことをやって、後でもの嗤^{わら}いにならないであろうかどうかを

心配した。

課長の返事はなかなか出て来なかった。その間、白井青年はしきりにかきくどいた。課員が、課長の前の未決書類函へ帳簿を入れていった。それは、さつきからそのへんをまごまごしている黒表紙の事件引継簿であつた。

「とにかく……まあとにかく、私から係へよく話をして置きましょう。それで、博士の人相書や——写真があれば更にいいですね——それから失踪の時刻やそのときの服装、その他参考になる事柄を出来るだけたくさん書いて私の許まで提出されたい。私としては出来得るかぎりの御便宜を^{はか}図るでありましょう。どうぞ目賀野先生へよろしく」

そういわれれば誰でも面会の終おわりへ来たことに気がつくものである。白井青年は、いい足りなさそうな顔付で、その部屋を出て行った。

白井の姿が部屋から消えると、課長はその途端とたんに彼から頼まれたことを一切忘れてしまった。これは永年に亙る課長の修養の力でもあつたり且かつまた又習慣でもあつた。〃ものごとを記憶するよりは、出来るだけ忘れよ〃という金言があつたと確信している田鍋課長であつた。

だが課長は、間もなく白井から頼まれたことをはつきり思い出さないわけにはいかない運命もとの下にあつた。それは彼が忠実に未決書類函へ手を延ばし、黒表紙の引継簿の仕切紙の挟まっている

ところを開いて読んだときに、そうだったからである。

その頁は、昨夜の池袋駅事件につき、第二報告書が赤インキで書き入れてあつて、

“——前記姓名未詳みしょうの男は、二十五歳前後の青年にあらずして、実は六十五歳前後の老人なること判明せり。かく判明せる原因は、該要保護人がいを署内（目白署）に收容せる後に至りて、該人物が巧妙なる鬘かつらを被り居たることを発見せるに因るよ。尚なお、同人所有のものと思われる靴は、赤革のスーツケースにして、大きさに不相応なる大型の金具及び把ハンドル手を備え居り、その蓋を開きみたるに、長さ二尺ばかりの杉角材が四本と古新聞紙が詰めありたる外ほかめぼしきものも、手懸りてがかとなるものも見当らず。

一方、前記要保護人は、收容後十時間を経るも未だ覚醒せず、体温三十五度五分、脈みやくはく搏はく五十六、呼吸十四。その他著しき異状を見ず。引続き監視中なり。——”

とあつたので、課長はそれと気付き、立去つた白井青年の後を課員に追わせたが、遂に彼の姿を見つけることが出来なかつた。課長としては、果して目白署に保護中の当人と赤見沢博士とが同一人かどうかは不明だが、年齢としがちようど博士と合うので、損そん損そんと思つても、行つてみてはどうかと白井にすすめるつもりだったのである。

研究生すみれ嬢

白井は、ぼんくらではなかったと見え、その足ですぐ目白署を訪ねている。

やっぱり、赤見沢博士であつた。

彼は署の電話を借りて、とりあえず目賀野に知らせた。目賀野は愕おどろいて、すぐ博士を引取りに行くからといった。

それから一時間ほどして、目賀野は医師やら博士の姪めいの秋元千草という麗れいじん人や博士の助手の仙波学士を伴い、自動車で駆けつけた。そして一札いっさつを入れ、人事不省じんじふせいの博士と遺留いりゆうの鞆かばんとを内

荷物もろとも引取っていったのであった。

博士を護つて、一行は目黒行人坂の博士邸へ入った。

雑用係の川北老夫妻と、研究生小山すみれ嬢とがびっくりして博士の帰邸を迎えた。

目賀野の指図^{さしず}で、白井は出迎えた人々を掴^{つか}まえて話をした。

「わしは存じて居りましたが」と川北老はいつた。「先生さまが変装なすつて、そつとお出懸^{でか}けになるところを確^{たし}かに見て居りました。はい、トランクをお持ちになつていましたなあ。おお、このトランクに違いありません。色といい形といい大きさといひ……。先生さまは外出なされるとき必ず若い男になつてお出懸けなさるんで、これは昨夜にかぎったことではございません。その

こみ入った理由わけはわし如き者に分ろうはずはございません。お出懸け先でございますか、それは全く存じません。先生さまは、爺じいや、これからどこへ行ってくるぞなどと仰おっしゃ有るお方じゃございません。……坂をのぼって目黒駅の方へお出でなされたことだけは間違いねえでがす」

博士の昨夜の行動について喋しゃべったのはこの川北老だけであつた。他の妻君のお綱婆さんも、小山研究嬢も、共になんにも語らなかつた。

白井は、目賀野の指図で、もう一つの重大申入れを留守番の人々に行つた。

「実は、僕はこの前からしばしばこちらへ伺つて博士に或る物の

御製作をお願いしてあったんだ。昨日はその出来上ったものを僕の許へお届け下さるお約束の日だった。博士はこのトランクに入れて、僕のところへ向われたんだが、その途中であのような病態となられた……」

そういつているときに、目賀野が連れていた医師が入って来て、博士の容態について報告した。目下麻痺症状がつづいている。その原因は不明である。しかし急変はないと思うから、当分このままにそつと寝かして置くがよろしく、次第によって明日か明後日から滋養浣腸などを始めることにしたいというのだった。目賀野は目くばせをして、医師をこの部屋から去らせた。そして白井の腰の上を肘でついた。

「……そこでですね」と白井は小山研究生と川北老夫妻へ気ぜわしく話しかけた。「このトランクとその中身とを、僕に預けていただきたいんですがなあ。もちろん博士が意識を回復されればそのとき改めて博士に申入れるつもりですが、それまでのところを、僕に預けておいて頂きたい。そしてかねがねその代償として博士にお支払いすることになっていた金十万円也を、今ここに置いて参りますから、それならあなた方も承諾して下されやすいと思う。ね、いいでしょう」

そういつて白井は、十万円さつたばの紙幣束を三人の方へ差出した。三人は鶏とりのようにびっくりして、隅すみへ固まって相談をはじめた。

やがて相談がまとまったと見え、三人は白井の方へ戻って来た。

川北老が代表者となつて折衝せつしようの任に就くものと見えた。果然彼は発言した。

「とりあえずわしら留守番の者が相談ぶつたんですが、その大金はお預りしますまい。その代り品物の何と何とを持って行かれるか、その品目を書いた借用証を一札入れていつて下せえ。小山さんもそういわつしやるだ」

臼井の眼が小山すみれ嬢の方へ動いた。すみれ嬢は猫のように大きな目をじつと据すえて、臼井の顔を睨にらみかえした。

「承知しました。そうしましょう」臼井は目賀野の信号によつて、そのように返事をした。それから小机の上に紙を延べて借用証を書き始めたが、その品目を書くについてトランクをあける必要に

ぶつかつた。開いて中を見せれば、すみれ嬢の大きい目は白井の脳髓を突き刺してしまふだろう。彼は、そうした。

「ええー、よくごらん下さい」

すみれ嬢は、トランクの中を嘗なめんばかりにして入にゆう念ねんに改めた。彼女が用を終つて顔をあげたのを見ると、その面おもてにはほつとした色があつた。

「よくごらんになりましたね。品書は、一つトランク、一つ木材四本、一つ新聞紙若じゃっかん干、以上——でいいですね」

すみれ嬢が川北老に目配せをしたので、川北老が、「はい。それでしょうがす」

と返事をした。

白井は記名捺^{なつ}印^{いん}をして、その預り証を川北老に手渡した。川北老はそれをすみれ嬢に見せ、嬢がうなずくと、それを八つに畳^{たた}んで、胸のポケットに収^{しま}つて釦^{ボタン}をかけた。

取引は終つた。

目賀野と白井は挨拶をして、玄関を出た。待たせてあつた自動車の中には、さつき活躍した医師と、若い男女が各一人待つていた。その若い男女は、さつき目白署において、博士の姪の秋元千草と博士の助手たる仙波学士と名乗つた二人であつたが、この二人はこのさわぎを他^よ処^そに自動車を下りもせず、ぽかんとしていた。それもその筈、実は両人は博士の姪でもなく助手でもなく、目賀野が便宜^{べんぎ}上連れて来た脇役の人物であつたのだ。その便宜とは、

もちろん署から疑いを持たれることなしに、博士と鞆とを引取ることにあつた。

こうなると目賀野という人物は、なかなか油断のならない重要人物であることが知れて来るが、彼の本来の面目は次の章に於ておい一層よく知れよう。

秘密地下室

省線たばた田端駅を下りて西側に入り、すぐ右手の丘をのぼり切ると

そこに目賀野邸があった。

鞆を護衛した目賀野たちの自動車は、邸内に滑りこんだ。すべ

玄関にとびだして来た書生が三名。自動車の扉が明いて、ぴよんととび下りたは目賀野であった。

「さあ、こつちへ寄越せ」

と、目賀野が伸ばす手に、車内から続いて現われた白井が例の鞆を手渡す。

「おい白井。お前だけ、わしについて来い。外の奴は、邸のまわりを嚴重に警戒して居れお」

目賀野はそういいすて、鞆を大事に片手にぶら下げて、どんどん奥へ入っていった。白井は遅れまいと、そのあとを追う。

自動車から最後に下りた草枝と千田が、顔を見合わせてにやりと笑った。二人は連れ立って、別の小玄関から上にあがった。

目賀野は、廊下をどンドン鳴らして、奥へ奥へと入っていった。一等奥に、洋間があつた。彼はポケットから鍵束を出して鍵を探していたが、やがてその一つを鍵穴に入れて廻した。

重い扉は、始めて開いた。

目賀野は鞆を持って、中へ入った。

「臼井。うしろを閉めろ」

「はい」

扉が閉められた。と、自動式に錠じょうがぴしんと掛つた。

この洋間には、窓が一つもなかった。しかし天井からは豪華な

シャンデリアが下つて、あたりを煌々こうこうと照らしていた。大理石のマンテルピース、一つの壁には大きな裸体画、もう一つの壁には印度更紗サラサが貼つてあつた。立派な革椅子に、チーク材の卓子など、すこぶる上等な家具が並んでいて、床を蔽おおう絨氈じゅうたんは地が緋色ひいろで、黒い線で模様がついていた。

隅のところ、上から見ると三角形になつている隅の飾戸棚があつた。目賀野はその戸棚の硝子戸ガラスどをあけた。洋酒壇が並んでいた。

その中は、瓢箪ひょうたんを立てたような青い酒壇があつた。目賀野はその酒壇の首を掴つかむと外に出し、もう一方の開いた手あを戸棚の奥へ差入れた。そして何か探しているらしかったが、すると突然、

裸体画のはいった大きな額縁がくぶちが、ぐうつと上にあがったと思うと、そのあとにぽつかりと四角い穴が開いた。そしてその穴の中に、地下室へ続いているらしい階段の下り口が見えた。

「臼井。その鞆を持って、こつちへ下りて来てくれ。鞆は大切に取扱うんだぞ」

「はい、承知しました」

目賀野のあとについて、臼井は鞆を持って秘密の階段を下へ降りていった。

下には十坪ほどの秘密室があった。この外にも倉庫や地下道や抜け穴などがあった。目賀野自慢のものであった。

「さあ、鞆をここへ載せて……そしていよいよ赤見沢博士きんせい謹製

の摩訶不思議なる逸品いつびんの拝観と行こうか」

目賀野は、童のようににこにこ顔だ。

臼井が鞆を卓上へ載せる。

「開いていいですね」

「ああ、あけてくれ。丁重ていちょうに扱あつかえよ」

「はあ」

臼井は、鞆についている金色の小さい鍵を使って、そのスーツケースを開いた。

鞆の中には杉の角材かくざいと見えるものが四本と、新聞紙と見えるものが十四五枚とが入っていることは、さつき調べたとおりであった。

「さつきは、ひやひやしたよ。これを調べているうちに一件がもそもそ動き出しやしないかなあと思つてね」

「はあ」

「とにかく、ひどく心配させたが、これをこつちへ引取ることが出来たのは非常な幸運だった。——いや、君の骨折ほねおりも十分に認める。さあ、その材木みたいなものを、外に出したまえ。そつと卓子へ置くんだよ。乱暴に扱うと、急に跳ねだすかもしれないからなあ」

目賀野は、なんだか訳のわからない無気味なことを喋しゃべって大だい恐おそ悦えつの態ていであつた。

白井は、鞆の中から角材を出した。四本とも皆出して、卓子の

上にそつと置いた。また新聞紙も皆出した。鞆の中は空っぽになった。

「さあ、これでいい訳だ。おい白井、その鞆を閉じてくれ」

目賀野の命令どおり、白井は鞆の蓋をばたんと閉めた。

目賀野の顔は、いよいよ緊張に赭味あかみを増した。彼の目は鞆に釘くぎづけになっている。

が、そのうち彼の目は疑惑に曇りくもを帯びて来た。

「どうもおかしい。鞆はおとなしい。おかしいなあ。……ああ、そうか。白井。その鞆に鍵をかけてみろ」

白井は命ぜられるとおりに、鞆の錠に鍵を入れて、錠を下ろした。

鞆は卓上に於て、再び熱烈な目賀野の視線を浴びることとなつた。

四五分経つと、目賀野の顔がすこし蒼あおざめた。彼は鞆の傍へ寄ると、いきなり鞆を持ち上げ、力いっぱい振つた。

それがすむと、彼は鞆をもう一度、そつと卓子の上へ置いた。それから、じつと鞆を注ちゆう視うしした。

彼は小首をかしげた。

もう一度鞆を抱きあげると、上下左右へ激しく振つた。それがすむと、卓子の上へ戻した。但しこんどは鞆を横に寝かせて置いた。

彼は腕組をして、鞆を睨にら据みえた。

一分二分三分……彼の顔は硬こわまった。と、彼はその鞆を手にとるが早いのか、どすんと臼井の足許へ投げつけた。

「な、なにをなさるんです」

臼井の顔も蒼くなつた。

「ばかッ。この鞆は、ただの鞆じゃないか。こんなものをありがたく受取つて来て、どうするつもりか」

目賀野は、満身朱しゅほん盆ぼんのようになつて、臼井を怒鳴どなりつけた。

「ただの鞆だと断定するのは、まだ早すぎると思います。もつとよく研究してみるべきではないでしょうか」

「駄目だ。これだけ色々やってみても、がたりともせんじやないか。ただの鞆に過ぎないことは明めい白はくだ。赤見沢博士謹製のもの

のならこんなことはない」

「おかしいですね。……博士はこの鞆と共に警察署へ保護されていたんで、間違いはない筈なんですがね。それとも……」

と、臼井はしばらく自分のおでこを指先でつまんで考えこんでいたが、そのうちに彼は指を角材の方へ指した。

「ああ、これだ。この杉の角材ですね。この中に博士の仕掛があるのですよ。閣下の御註文ごちゆうもんのとおり鞆にして置くと目に立つという心配から、仕掛はこの角材の中に秘ひめて邸から持ち出されたんじゃないでしょうか。いや、それに違いありません。そうでもなければ、ねえ閣下、鞆の中に杉の角材などを大事そうに収しまつておくわけがないですよ」

白井は、勇敢なる説を立てて、目賀野を説服せつぷくにかかった。

「杉の角材の中に仕掛があるというのか。それはどうも信ぜられないね。しかし念のためだ、調べてみろ」

目賀野は白井を督励とくれいして、四本の杉の角材を手にとるやら耳のところまで振ってみるやら、それから目方を考えてみるやらして、さまざまな診察を試みたが、その結果は、杉の角材であるという以外の化物ではなさそうであつた。

「貴様のいうことは出鱈目でたらめだ」

目賀野は再び激昂げきこうに顔を赭あかくし始めた。

「待つて下さい。博士の仕掛は、この角材の中にしつかり入っているんでしようから、この角材を鉋なたで割つてみましょう」

白井は、部屋の隅の函はこの中から鉋を出して来て、角材をほかりと縦たてに二つに割った。それから中を調べた。が、それは杉の角材であるに十分であつたが、他の何物をも隠していなかつた。

白井は、次々に残りの角材をほかりほかりと割つてみた。すべては、只の角材であるという以外に、何の新発見もなかつた。

「それ見ろ。なんにもないじゃないか。貴様は恩知らずだ。底の知れない鈍どんぶつ物だ。ああ貴様のような奴は、もうわしのところへは置いておけない。とつとと出て行け」

ふいうち
不意討

臼井の顔が、酒に酔った人のように真赤になる。目賀野の顔色はすごいまでに蒼い。^{あお}

「こんななまでにして貴方に尽してつくいるのが分らんですか」

臼井が残念そうに声をふり絞った。

「わしの命令から逸いつだつ脱するような者をこのまま黙って許しておけると思うか。事の破綻はたんはみんな貴様のよけいなことをしたのに発している。こんな鞆が何に役立つ。この材木は一体何だ。風呂ふろ桶おけの下で燃すのが精一杯の値打だ」

「そんな筈はないんですがなあ。もつと慎重によく調べさせて下

さいよ」

「その必要はない。何もかもおれには分つとる。おまけに博士を
あんなに生ける屍しかばねにしてしまつて。……わしの計画は滅茶滅茶めちやめちやじ
やないか」

「博士は外出時に変装するということを貴方が僕に注意しなかつたのが、そもそも手落ちですよ」

「博士のラボラトリーの前から警戒監視すべきが当然だ。しかるに貴様は骨を惜んで田端駅で待つていた。おうちやくもの横着者め。そして

博士が到着しないと分ると、そこで初めて目黒へ駆けつけた。そのときはもう後の祭だ。博士はもの言わぬ人となつて目白署へ収容され……そうだ、まだ貴様にいうことがあつた。貴様は田鍋の

ところでよけいなことを喋しゃべつたな。知っているぞ、ちゃんと知っている。博士の部屋へ入ると、猫の子が宙に浮いてばたばたやっていたと喋つたろう。それから博士に仕事を頼んだことまでべらべら喋つちまっただらう。どうだ、それに違ちがいなかろう」

「それは……それは、そういわないとあの場合、捜査課長の心を動かすことが出来なかつたからです」

「バカ。捜査課長にあれを連想せしめるような種を提供して、わしの方は一体どうなると思うんだ。田鍋のやつは、勘は鈍いが、あれで相当克こく明めいでねばり強いから、そのうちにはきつと一件を感かんづくくに違ちがいない。そうなつたら……ああ、そうなつたら万ばん事じき休ゆうすだ。わしの最後の一線が崩れ去るのだ。憎い奴だ、貴様は

……」

「まだ投げるのは早いです。打つべき手は、まだいくらでもあり
 ましょう。こんどは間違いなくやります。一命を抛なげうつてやります。
 命令して下さい」

「貴様に対する信用はゼロなんだが……よしもう一度使つてやる。
 いいか、こうするんだ。田鍋のところへ行くんだ。さっきの十万
 円で買収だ。買収に応じなかつたら田鍋の奴を早いところ誘拐ゆうかい
 してしまえ」

「はい」

と、電話が外から懸つて来た。

目賀野は電話器を取上げた。彼は簡単な返事をして電話を切つ

た。彼の奥歯がぎりぎりとう鳴っていた。

「白井、早くしろ。十万円はその書類棚の上に入っているから、開いて出したまえ」

「はあ」

白井は書類棚のところへ行つた。と、彼の脳のうてん天にはげしい一撃が加わつて、彼は意識を失つてしまった。

目賀野は、ほつと一息ついて、手にしていた丸い盆を、隅の卓子へかえした。それから隣室へ通ずる扉を開いて、大声で呼んだ。すると、いつぞやの若い男と女とが、奥からとび出して来た。それを見ると、目賀野はいった。

「一時この邸から退去せにやならなくなった。千田はこの白井を

「かつ担いでれいがんぼし霊岸橋へ行つて、辰馬丸に乗込んですぐ出てくれ。行先は石のいし巻だ、まき草枝はもんぺをはいてわしといっしょに来てくれ。松戸へ出てから、すこし歩くことにするからなあ」

そういつているとき、天井に取付けてある高声器が、がらがらと雑音を出してから、ひとりで喋りだした。

「警視庁の自動車が門前に停りました。三人の紳士が今玄関に立つてベルを押しています。一番えらそうな紳士はねずみ鼠色のオーバーを着た大男です……」

そこまで聞くと、目賀野は万事を悟った。

「捜査課長の田鍋が来たんだ。さすがに早く気がついたな。さあ千田、今のうちに地下道を通つて長屋から出て行け。草枝は裏か

ら抜け出る。そして松戸の駅前の丸留の家で待っているんだ。もんぺはそこで借りりやいいぞ」

目賀野はそういつて命令を伝えると、彼自身は隣室へとびこんで、ばたりと扉を閉じた。

鞆の怪談

田鍋課長一行は、一向要領を得ないで、目賀野氏が留守だという邸から引揚げた。もし課長が、今しがたその地下室での出来

事を勘づいていたら、そのように温和おとなしく帰りはしなかつたらう。

目賀野は行方不明となつた。だが、田鍋は別に大して重要と思われないから、捜査命令を出しはしなかつた。その代り彼は赤見沢博士の容態ようたいには十分の警戒を払い、専門の警察医を附添させた。こうして、何だか正しょう体たいの分らないこの妙な事件は、田鍋課長側と目賀野側との間に喰いちがいのあるままでそれから先を別々に進行していった。

臼井は、あれから船に乗せられると間もなく正気づいたが、自分が船内に軟禁なんきんされている身の上であることを、千田から話されて知つた。こうなれば当分温和ゆだんしくしているより仕方がない。そのうちに千田や船員が油断ゆだんをするだろうから、脱出も出来よう

と考えた。但し脱出したのがよいか、しないで辛抱していた方が安全か、これは篤とくと考えてみなければならぬ問題だと思った。

ちようどその頃、東京に一つのふしぎな噂が流れはじめた。それは怪談の一種であるとして取扱われていた。人影もない深夜しんやの東京の焼跡やけあとの街路を、一つのトランク鞆かばんがふらりふらりと歩いていた、そのトランクを手に下げている人影も見当らないのに、トランクだけが宙をふわりふわりと揺ゆれながら向こうへ行くのを見たというのだ。

もし事実なら、奇々ききかい怪々かいなる出来事だといわなければならぬ。

その怪事を目撃者というのは、焼跡に建っている十五坪住宅の

主人で、昼間は物品のブローカーをしている人だったが、その人が夜中かわや廁へ入つて用を足しながら何気なく格子の外を覗いた、折おりから柄二十日あまりの月光が白々と明るく一面の焼跡と街路を照らしていたが、そこへ突然かのトランクが現われて、主人の目の前をすたすたゆらゆらと通り過ぎていったのだそうな。

「寝ね呆ぼけていたんじやねえよ。へん、この世せ智ち辛がい世の中に誰が寝呆けていられますかというんだ。信用しなきやいいよ。とにかくおれは、ちやんとこの二つの眼で靴の化物を見たんだから……」

と、その目撃者はたいへん自信に充ちて放ほう言げんしたという。

だが、およそ常識のある者なら、かの自称目撃者の言葉を信じようとはしないだろう。

奴やつこ 風かぜ や風船なら知らぬこと、重い卜

ランクが横に吹き流れて行くとは思われない。

では、トランクの幽霊ゆうれいか。トランクに霊あるを未だいま聞いたことがない。

結局この噂話は、一篇の笑話と化して笑殺しょうさつされるようになったが、その頃、また別の噂が後詰ごづめのような形で伝わり始めた。それはやっぱり鞄変化へんげに関するものであった。

何でも新宿の専売局跡の露店街ろてんにおいて、昼日中ひるひなかのことだが、ゴム靴などを並べて売っている店に一つの赤革の鞄が置いてあったが、この鞄がどうしたはずみか、ゆらゆらと持上って、ゴム靴の海の上をすれすれに往来へ出ていったのである。店番をしている若者はびっくりして後を追おい駈かけた。幸いその鞄は隣の店の前

あたりにうろうろしていたので、かの店員は靴に追いついて、左
 右の手をもって靴の両脇から抱き留めたのである。これは重大な
 事柄である。後に分ったことであるが、そのときかの店員が靴を
 取り押えたときの筋圧感きんあつかんはといえ、一向靴を取り押えたよう
 な気がせず、なんだか幕に手をかけて引いたように感じた由よしであ
 る。つまり非常に軽々と感じ、そして少し遅れて慣性かんせいのような
 ものをも感じたというのである。

その店員の感想にはもう一つ附加えるべきものがあつた。それ
 は彼が手を取押えたトランクの横腹から、そのトランクの把柄はへいへ
 移し、トランクをさげたときのことであるが、彼はずつしりとし
 たトランクの重さを急に感じたというのである。それはなんだか

俄にわかにトランクの中へ或る重い物が入ったように感じたのである。

そこで彼は念のためトランクをゴム靴を並べてあるその上に置くと、トランクの懸かけがね金をひらいて開けてみた。が、トランクの中には何も入っていないなかつた。全くからっぽであつたのだ。

彼は拳固げんこをこしらえると自分の頭をごつんと一撃してからそのトランクの口を閉しめて再び店の一隅へ並べた。

しばらくは何事もなかつた。

ところがそれから二三分経つたと思われる後のこと、例のトランクは再び、のそのそと店から外へ匍はい出だしていったのである。店員はそれを見て知っていた。そのトランクを後から抱き止めなければ損おそをする虞おそれがあるという気持と、気味がわるくて手が出

せないという気持が、彼の心の中で闘いを始めた。そのうちに靴は往来へ飛び出し、彼の眼界から失せた。そこで彼の心の中に怫ふつぜん然と損得観念が勝利を占め、彼はゴム靴の海を一またぎで躍り越えて往来へ飛び出した。そのとき彼はなぜか声が出なかつた。うである。大声で叫んで人々を集めればよろしかつたのにも拘かわらず、なぜか無言のままだつた。それは多分、そのとき軽率けいそつに叫び声をあげて人々にこの事件を知らせたが最後、結局は彼自身の頭が変になつていたんだなどと後に指摘されることになつてはいやだと思つたらしいのである。

トランクはどこへ行つたらう。

店員はそれを発見するのに大して骨を折らなかつた。その赤革

のトランクは、金色の金具を午後の太陽の反射光で眩しく光らせながら、広い道路を半分ばかり渡り、地上約三尺ばかりの高度を保つて、なおも向いの側の人道へ辿りつこうとしていた。

と、左の方から一台のトラックが疾走して来て、呀っという間にそのトランクに突きあたった。トランクは、フットボールのように弾かれて上へ舞いあがった。と思う間もなく下へ落ち始めた。するとその下へトラックの車体がすうっと入って来て、トランクを受け留めた。そのトラックは空であつた。そのトラックは、始めトランクに突き当たつたそれだつた。かくしてそのトラックは速力を緩めることなしに、店員にガソリンの排気をいやというほど引掛けて遠去かつていつてしまったのである。

店員は、トラックの番号を覚おぼえることさえ忘れて、呆ぼうぜん然と立ちつくしていた。なんとという気味のわるいトランクだろう。豚ぶたのように跳ねあがり、通りすがりのトラックへとびこんで逃げてしまいやがった。これで、今朝、顔色のわるいカーキ服の男から三百円で買い取った品物をなくして、三百円丸損となってしまうたぞと、大いに恨うらめしく思った。

この話が、誰から誰へとなく拡がって行つたのである。

怪かい異いは続つく

東京朝夕新報の朝刊八頁の広告欄に、氣のついた人ならば氣になつたであらうところの三行広告が二つ並んで出ていた。

○紛失、赤革トランク、特別美且大なる把柄はへいあり、拾得届出者に

相当謝礼、姓名在社三二五番

もう一つは、次のとおりであつた。

○紛失、赤革トランク、特別美且大なる把柄あり、拾得届出者に

莫ばくだい大謝礼、姓名在社三二六番

つまり両方とも赤革トランクを返してくれと訴えているものだった。

前日トラックの運転手は、空トラックを店のガレージの前に停

め、車体の点検を行ったとき、ふしぎなことに、後の荷置き場の隅すみに赤革トランクが逆さかさになつて置かれてあるのを発見した。彼はそれを下へ下ろし、開いても見たが全然見覚えみおぼのないものだった。

そのうちに朋輩ほうばいの誰彼がそのまわりに集つて来た。そしてこのようなすてきな靴を何処で手に入れたのかと知りたがつた。

かの運転手は早速返事をして途中まで喋しゃべつたが、そこであとの言葉を嘸のみこんだ。そして俄にわかに彼は一つの創作をひねりだしてそれを以て返事に継つぎ足たそうとしたとき、支配人の酒田が割込んで来て、その靴を欲しがった。結局、運転手はその靴を百円札五枚で支配人に譲り渡した。売った方も買った方もにこにこしていた。

酒田はその鞆を手にぶら下げて、そこから程遠からぬところにある彼の邸へ歩いて帰った。彼は目下やもめ暮しであつた。家族たちはまだ疎開先に釘づけのままだつた。東京のこの家には、家政婦の老婆が一人仕えているだけだつた。

酒田はその鞆を持って帰ると、押入を開いて、下の段の奥へ押込んだ。そしてすぐ襖を閉めた。どういうわけでそうしたのか明瞭でないが、多分あまり安く値切つて買ったのが氣になつていたのかもしれない。

夕食後、彼は居間に引籠つた。例の鞆を押入から出して、絨毼の上に置いて開いた。それから彼は筆筒の引出をあけて中からなまめかしい婦人の衣類を取出し、それを一々電灯の灯の近

くへ持つていつて眺め、指先で布地を摘み且つ匂いを嗅いだ。そして二種類に別けて積んでいつたが、その一方を例の鞆の中へていねいに入れ始めた。長襦袢もあるし、錦紗もあるし、お召もあり、丸帯もあり、まるで花嫁御寮の旅行鞆みたいであつた。その上にも彼は、隅の金庫を開いて中から取出した貴金属細工のついた帯留や指環の箱、宝石入りのブローチの箱、腕環の箱などをその鞆の中、ほどよきところへ押込んだ。最後に特別になまめかしい鹿の子緋ぢりめんの長襦袢を上へのせ、それから鞆の蓋をしめたのであるが、ぎゆうぎゆうに詰まっているので蓋は外に向つて太鼓腹のように膨らんだ。そのあとで彼、酒田は意外なことを発見して強く舌打をした。

「ちよツ。この鞆には、鍵が二箇もぶら下つてゐるのに、かんじん肝腎の錠じょうまえ前がついていないじゃないか。見かけによらず、とんだインチキものだ。ええツ、腹が立つ！」

鍵はあれども鍵穴がない。これでは仕様しやうがない。折角せつかくトランクに詰めて、明日は横浜へ売りに行こうという寸法だったが、鍵のかからないトランクでは、あっちへ持っていったり、こっちへ預けたりしているうちにあぶないことになりそうだ。だが、折角ぎつしり詰めこんだものを、他のトランクに移すのは面倒めんどうだ、今夜はこのままにして、後は明日のことにしようと、闇屋やみやの旦那はこのところ聊いささか過勞の体ていにて、寢椅子の上へ身体をのせた。

「旦那さま。もうここの戸締りとじまをいたしてよろしゅうございまし

ようか」

婆やの声である。

酒田が、締めしめておくれというと、婆やさんは硝子戸ガラスをあけて、

長い廊下を箒ほうきでさらさらと掃はき出し、それから戸袋のところへ行

つて板戸を一枚一枚繰り出し始めたのである。そのとき勝手の方で電話のベルが鳴りだした。婆やさんはそれに気づいて勝手の方へ駆かけこんで行く。やがて婆やさんが再び駆け出して来て、酒田へ電話を取りつぐ。そこで酒田は寝椅子ねいすからむっくり起上つて、

婆やと共に勝手の方へ行く。電話機は勝手の廊下の隅にあつて、そこは暗いので、婆やさんは電灯を急いで吊つりかえなければならなかつた。

こうして僅か十分足らずの時間、お座敷の方を空くう虚きよにして置いただけで、電話が終ると酒田と婆やさんとは再びお座敷の方へ戻つて来て、婆やさんは雨戸あまどの残りを戸袋から繰くり出すし、酒田はラジオをちよつとひねつて、そして男女合唱がとび出して来ると、すぐスイッチをひねつて消し、それから煙草をつけて安樂椅子へ腰を下ろしたんだが、忽たちまち彼はバネ仕掛の人形のようにとびあがった。

「あれツ、ここに置いてあつたトランクが見えないぞ。……トランク、どこへ持つて行つた？」

それからの騒さわぎを一々克明にここに写いしている違ちがはない。とにかくかのトランクは煙のように消えてしまったのである。庭の植

込みに隠れていたかもしれない泥坊どろぼうの詮議せんぎや、一応は疑われた
 婆やさんのこと、酒田の物忘れについての疑惑ぎわくなど、いろいろの
 ことが入りくんでややこしくなったのであるが、誰しもまさかト
 ランクが悠々と絨氈の上から腰をあげ、明け放しの硝子戸の間か
 ら、朧月夜おぼろづきよの戸外へと彷徨さまよい出たものとは思わず、その事実を
 推理し得た者はなかったのである。

それからそのトランクはどういう出来事にぶつかったか。

そとぼり

外濠そとぼりの堤の松の下の暗闇くらやみを連れだって行く若い女と男とが

あつた。女は男に対して強硬な態度をとつて、男を引放してずん
 ずん足を早めていた。その女はやがて——そのまま推移せば男
 のために締め殺されて、枯草の上に身を横たえなければならぬ

のであったが、運命のくすしき足取は、女の生命を危局の寸前に救った。それは今や鼠ねずみに向つて躍りかかろうとする猫の如きその男の腰に、どすんと突き当つた赤革のトランク一箇——女は生命を捨てずに済んだ。男は荒療治あらりようじを執行するに及ばなかつた。男も女も、一応妖異よういに対する恐怖心を起しかつたが、それは慾心によつて簡単に撃退された。開いた鞆の中のすごい内容物はあらゆる問題を解決した。女は急に男に対してやさしくなり、そしてその鞆を二人で守つて男のアパートへ入り、同棲生活どうせいの第一夜を絢爛けんらんと踏み出すことに兩人の意見は完全なる一致をみたのであるが、この詳細もここにくだくだしく描写えいごしている違ちがはない。

それよりは問題はトランクの運命にある。そのトランクは翌朝

兩人が目ざめてみると、たしかにそこに置いた筈の夜具の裾すそのところには見当らず、兩人は目を皿にして部屋中を匍はい廻ったがどこにもなく、そこで兩人互いに相手を邪じやすい推して立廻りへと移行したが、兩人が相手の顔を捻ねじて天井へ向けたときに、そこにぴつたり吸いついている前夜のトランクを兩人が同時に発見した。そこで兩人は再び協力し、誰がトランクを天井の棧さんに釘をうつてそれへ引掛けたかを怪しみながら、机に椅子を積み重ね、箒こや蠅うもりがさ蝠傘ふくさんやノックバットまで持ちだしてそのトランクを下ろそうと試みた。そのうちにどうした拍ひょうし子かトランクの蓋が開いて、その中身が五彩ごさいの滝となつて下に落ちて来た。兩人がそれにとびついて、かき集めている間に、トランクは明いた窓から黙って外へ

飛び出していった。

トランクの後を追って書きつけていると際限さいげんがないので、しばらくトランクから離れた話をしようと思う。

帆村探偵登場

冬日の暖くさしこんだ硝子窓ガラスの下に、田鍋たなべ捜査課長の机があつた。課長と相對しているのは、長髪のでつぺんから地肌じはだがすこし覗いている中年の長身の紳士だった。無髭無髯むしむぜんの顔に、細い黒くろがぶ

縁ちの眼鏡めがねをかけ、脣が横に長いのを特徴の、有名なる私立探偵
帆村莊六ほむらそうろくだつた。一頃から思えば、この探偵も深刻にふけて見
える。

「猫の子が宙を飛べるものなら、靴が宙を飛んだつて、仔猫の場
合以上にふしぎだとはいえないわけですね」

「いや帆村君、それは違うだろう。猫の子が宙を飛ぶのは許さる
べきとしても、生せいなき靴が宙を飛ぶのは怪談だよ。その怪談に怯おび
やかされてわが五百万の都民は枕を高うして睡ねむれないと山積する
投書だ。あれあの籠かごを見たまえ」と課長は、二つ三つ向こうの部
下の机上を指す。それは尤もつともな風景を見せていた。

「怪談ということでは、この事件の解決はちよつとむずかしいで

すよ。物理学で行くなら、仔猫も靴も同じ格です。そしてさらに飛ぶ場合も考えられないことはない。課長さん、そのことについて赤見沢博士の助手の何とかいう婦人に糾ただしてみましたか」

「だめだ、あの小山すみれは。ああいう女は、一旦依怙えこじ地となつたら、殺されても喋しゃべらないものだ。赤見沢はさすがにそれを心得て雇っている。沈黙女史は今のところそつとして置くしかない。

しかし——帆村君。生もない靴がなぜ飛び得ると考えるのか、怪談以外の考え方に於て……。ねえ君、林檎りんごも落ちるよ、星も落ちる、猿も木から落ちる」

「万有引力が正常普通に作用するかぎり、それはその通りです。猫の子が宙を飛び、靴が空くうを走るためには、それらの物体に万有

引力と反対の方向に作用する相当の力が働いていると断定して間違いないわけでしょう。課長さん、これに答えて下さい」

「さあ、わたしには分らんね、全く……」

「万一に考えられることは、特別の浮力です。物体が空気の中にあるために、自分が排除はいじよする容積だけの空気の重量に等しい浮力が、万有引力と反対方向に働いているのですが、こんなことは断るまでもない常識事です。そしてその浮力が仔猫の場合に於ても、靴の場合に於ても万有引力に比して殆んど省略し得る程度の微小びしょうなる力です。これはこれで片づいたとして第二に考えられることは……」

「頭の痛くならんように喋しゃべることはできないものかね」

「もつとご尤もです。……それでそれは——第二に考えられることは、万有引力常数を変えてしまうこと。第三には第三の物体を誘致ゆうちし来きたつて、それによる引力を、万有引力以上に効きき目を持たせること。それから第四に、アインシュタインの設定した万有引力テンソルを……」

「待った。もうたくさん」

「第四は、今の場合論じなくてもすみませすから、横へどけて」

「みんな横へどけて、怪談へ戻ろうじゃないか」

「とんでもない。要するに、第二又は第三の素因そいんによつて、仔猫が宙を飛び、鞆が空を走るものと推定し得られないことはない。

赤見沢博士のユニークな頭脳はそれを装置化することに成功した

のではないか。仔猫が飛び靴が走るは、その装置化の成功を語っているのではないか。しからばもはや靴が深夜の焼跡をうろつこうと、真昼のビル街を掠めようと問題ではない。そうでしょうが……」

「いや、おかしいよ。靴は必ずしも空中を泳いでばかりはいない。神妙に下に落着いていることもある」

「そんなことは仕掛の工合でどうにでもなりますよ。たとえば、靴の把柄を手に持って靴を下げているときには、スイッチが外れるようになっていて異変は起らない。しかし把柄が握られていないときはスイッチが入って、靴は例の素因により万有引力に勝つて浮きあがる——つまり靴とその中身との重さが一枚の羽毛ほど

の重さに変わってしまう。そういうわけでしょうな」

「実際に出来るのかね、そんな仕掛が……」

「発明が出来れば、あとは仕掛を作ることなんか極めて容易ですよ」

「ふうん、そんな鞆がどんどん現れて管下一円を脅すことになれば、わし達は鞆狩りに手一杯となり、他の仕事が出来なくなるだろう。とにかく怪談にせよ引力にせよ、一大事件だ。早いところその核心を摘出して、犯人を検挙せにやいかん」

「犯人というほどのものじゃないでしょうに。それに赤見沢博士は今も人事不省を続けていて、何一つ出来ない」

「わしは赤見沢が真実不能者かどうか、嚴重に監視をしている。

序ついでに、あの女も小使夫婦も見張っている。赤見沢たちの犯行は、例の白井という若僧や前知事の目賀野が出て来れば分ると思うんだが、どういうわけか彼等は姿を見せん。それはなぜだろうか、どうも分らない」

「その白井氏や目賀野氏の行方こそ、即そつきゆう急きゆうに突きとめなければならぬですね。それから、靴は一日も早く取り押えなければならぬ。それと例の仔猫です。あの仔猫はどうなったか、あれはぜひ突き留めなければならぬですね」

「はあ、仔猫か。あんなものは大したことはあるまい」

「いや、そうじゃないですよ。あれこそ最も重視すべきものだ」
 「もうそろそろ本格的に化ばけ猫になる頃だという意味かね」

「あの助手女史が保管していないでしようか」

「あつ、そうか。よし、白状させてみる。不都合な奴だ」

名探偵ノート

その夜、田鍋課長と部下二名は、帆村莊六を交^{まじ}えて、ひそかに赤見沢博士の研究所を指^さして出発した。このことは絶対に秘密裡^{ひみつり}に行われた。捜査課長ともあろうものが、私立探偵の手を借りたなどという風^{ふうひょう}評^{ひょう}がたつては、田鍋警視は甚^{はなは}だ困るのであった。

もつとも課長は、今夜の行動を、役所の用事とはしないで、お化け靴と猫ねこまた又またに興味を持つ帆村莊六を援助するための特別行動である——と、彼の部下二名に説明してあつた。

帆村は、お化け靴については、前章に述べたような見解を持じていた。しかし彼は、この靴の素す性じょうについてまだ突き留めていないことは、田鍋課長の場合と同じだつた。

だが彼が、この事件に異常な興味を持って、解決に一生懸命の努力を払っていることは誰の目にも明白であり、従つてそのお化け靴についての考察については、誰よりも深いものがあり、そのことを田鍋課長もはつきり認めていたればこそ、こうして帆村莊六のうしろについて行く気にもなつたのである。正直な話が、課

長としては、このお化け鞆事件ぐらいいやりにくい事件は、本庁に奉職以来に一度も先例のないものだった。

今夜の行動は、帆村の示唆^{しさ}するところに従って、田鍋課長が蹶^け起^{つき}したという形になっていたが、実のところ課長としては何等自信のあることではなかった。行きあたりばったりに何か掴^{つか}めるかもしれない、とにかく助手の小山すみれを絞^{しぼ}ってみれば何か出て来やしないか——ぐらいの予想しか持っていなかった。

これに対して帆村莊六の方は、ずっと確^{たし}かな筋として、今夜の行動を割り出しているのだった。すなわち帆村の考察によれば、まず第一に、お化け鞆の誕生は赤見沢博士の研究所に違いないから、どうしてもそこをもっと詳しく調べる必要がある。誠^{まこと}に彼は

その研究所へ一度も足を踏み入れたことがないのであるから、今夜はぜひ入って調べてみたい。

第二に、あのお化け靴の製作を注文したのは元知事の目賀野であることは、白井の話から想像がつくが、目賀野は一体その靴をどんな目的に使用するつもりであったか、そのことは注文主として当然赤見沢博士に語ったことであろうし、従つてその製作の助手をつとめた小山すみれ女史にも全部又は一部が通じられている筈である。一体その目的は何であるか。それが分ればこの事件の解決はずつと早くなる。また、それが分れば、或いはこの事件は更に重大なる特性を曝露ばくろして前代ぜんだい未聞みもんの大事事件に発展するのではなからうか。これは永年探偵等をつとめて来た帆村の第六感

であつた。

それから第三に、お化け鞆と、赤見沢博士が電車の中で後生大事に抱えていた鞆——その中には杉の角材四本などが入つていた方の鞆——この両者の関係が、まだはつきりしないのであるが、これもなかなか重大問題だと思ふ。なぜなればこの問題には、赤見沢博士の遭難事件が関係している。つまり赤見沢博士が怪漢かいかんのために襲撃されたのは、お化け鞆を持つていたことによるらしく思われる節がある。博士はお化け鞆を怪漢のために奪われたのではあるまいか。そしてその代りとして、只の鞆が博士の昏睡こんすい体の横たに置かれてあり、共に目白署に收容されたのではないか。

帆村は、この二つの鞆を区別して考へていた。係官の中には、

両者を同一の靴とし、それが時には普通の靴であり、また時には化けるのだと考えているようであったが、帆村はこの二つが別物^{べつもの}だとしていた。それを区別するのに最もはつきりしている点は、赤見沢博士の昏倒^{こんとう}している傍^{そば}にあつた靴には、ちゃんと鍵がかかるとなつていたのに対し、かのお化け靴を手にしたことのある人々の話によると、そのお化け靴には鍵がかからない、つまり錠前がついていない。それともう一つは、お化け靴には特別に立派な把柄がついているとのことであつた。

もし出来るなら、この二つの靴を並べてみればよく分るのであるが、今はそんなことが出来ない。お化け靴は相変らず^{しんしゆつき}神出鬼没^{ぼつ}だし、目賀野たちが出頭して引取つていった只の靴の方は、

目賀野たちと共に目下行方不明とある。

もう一つ、帆村が特に重大視じゅうだいししていることがあった。それは案外誰も大して気にかけていないことであつたが、例の「赤革トランク紛失」の新聞広告のことであつた。

あの三行広告は、同じ日の同じ新聞の広告欄に、同じような文句でもつて、二つの広告が並んでいた。「拾得届出者に相当謝礼」と書いてある「姓名在社三二五番」と、もう一つは「拾得届出者に莫大謝礼」と書いてある「姓名在社三二六番」との二つだった。一体これは何者が出した広告なのであろうか。帆村が調べたところでは、前者は「葛飾かつしか区新宿二丁目三八番地松山」が出したものであり、後者は「板橋区上板橋五丁目六二九番地杉田」が出

したものであった。それらの番地を当つてみたところ松山という家も杉田という家もちやんとあつたけれど、その当人はこの広告主ではなく、本当の広告主は別にあつた。それに頼まれて名前を貸しただけのことで、その当時毎日何回か、連絡の人が尋ねて来たそうだが、もうこの頃は来なくなつたそうである。そして連絡に来た者は、松山の場合には、長屋のお内儀かみさん風ふうの女であつたそうだし、杉田の場合は、目の光の鋭い、そしていやに丁重ていちょうな口のきき方をする商人体の者だつたという。そこまでは分つてゐるが、その先のところは帆村にも調べがついていない有様ありさまだ。一体何者だろう、この二人の広告主は？

このことについては、帆村は田鍋捜査課長にも報告して、その

注意を喚起した。課長は帆村ほどこの問題を重大視はしていない。そしてこの二人の広告主の一人は、博士を昏倒せしめ、お化け鞆を奪った姓名未詳の兇賊であり、もう一人は例の目賀野であらうと考えていた。

だが帆村は、田鍋課長と考えを異にしていた。

広告主の一人は目賀野だと課長は推定している。しかし帆村は、そうでないと思っていた。なぜならば、目賀野ならば一度もそのお化け鞆を手にとって見たことがないから「特別美且大なる把柄あり」などというその鞆の特徴を知っている筈がない。だから目賀野ではないと思われる。

しからば二人の広告主は何者か。

酒田であろうか、外濠そとほりの松並木の下を歩いていた男であろうか。いやいや、そのどっちでもない。新聞広告の出たのは、彼らがお化け鞆に始めてめぐり合ったどりもずっと以前のことになる。トランクをトラックに受取って走ったそのトラックの運転手でもないことは、彼が酒田と満足すべき取引をしたことを考えれば、すぐに分る。では、新宿の露店ろてんで、この鞆を店に並べて売っていた店員であろうか。いや、彼でもなさそうである。なぜならば三行広告代金と鞆の値段とは殆んど同じであるので、広告を出したとて大抵たいてい戻って来ないことが分っているのに広告をする筈がないと思われる。

すると、広告主はもつと以前から、このお化け鞆に関係してい

た人物に違いない。この十五坪住宅の主人が夜廁かわやの窓から何気なにげなく外を見たところ、トランクが月の光に照らされて、ひとりで道を歩いていたという東都怪異譚とうとかいいたんの始まり——あの頃更さくらに以前の関係者に相違ない。

一体、誰と誰であろう。

一人は、田鍋課長の指摘してきしたとおり、多分お化け靴を博士から奪った兇賊であろうと思われる。しかしこのことも、博士が意識を恢かいふく復して、遭難談を詳くわしく述べてくれる日までお預けとしなければなるまい。今一人の人物については、全く五里霧中ごりむちゆうである。が、この二人の正体を突き留とめさえすれば、この事件の解決は一層早くなるものと、帆村は確信し、いま推理を懸命に働かせて

いる最中なのであった。

なにさま、帆村探偵の考え方は、田鍋課長のそれとは大分違っている。

深夜の研究室

闇やみまぎに紛れて、四名は赤見沢研究所の建物の壁際かべぎわにぴったり取付いた。

時刻は午後十一時であった。

研究所のすべての窓は真暗まつくらであつた。みんな寝てしまつたであらうかと始めは思つたけれど、窓の一つからすこし灯ひが洩もれているので、一同はそれを目当てめあにしてその窓下へ身をひそめたわけである。

ジイイイ……と、妙な音が、室内にしている。

中を覗のぞこうとしたが、窓が高い。

そこで田鍋の部下二名が台の代りになり、帆村と課長を肩車に乗せた。この珍ちんみょう妙な形でもって、透間すきまを通して窓の中を覗いた。

カーテンの隙間から、室内の模様をうかがうことが出来た。

「おやア……」

「あッ」

帆村も田鍋課長も、思わず愕おどろきの声を発して、あわててあとの声をのみこんだ。

室内には、まことにふしぎな光景が展開していた。

その部屋は、赤見沢博士の研究室の一つで、多数の器具機械がごたごたと並んでいた。そしてそこに三人の人物が居た。

そのうちの一人は、助手の小山すみれ女史であつて、彼女がそこに居ることには格かくべつ別愕おどろきはしない。

もう一人は、若い男であつた。かなり背の高い、立派な顔立の青年であつて、にこやかな笑いをたたえて、小山すみれの方を見つめている。

この男の顔を見て愕いたのは帆村莊六ではなく、田鍋課長であつた。

(はてな。この女たらしの男は、どこかで見たことがあるぞ)

たしかに課長の記憶の中にある男であつた。しかしどこで見た男だつたか、すぐにはそれを思出すことが出来なくて、課長はいらいらして来た。帆村はこの青年の顔に、何の記憶も持つていなかった。ただ、小山すみれ嬢とはおよそ反対の立派な男子で、皮肉な対^{たいししょう}照をなしていると感じたことであつた。が、しかし、彼はあまりながくこの美貌^{びぼう}の青年に見惚^{みと}れていることが出来なかつた。というのは、残るもう一人の人物が、彼の注意力の殆んど全部を吸収つてしまつたからである。そのことは、田鍋課長にと

つても亦また同様であつた。

（あれは赤見沢博士に相違ないが、一体どういうわけで博士はここにいるんだらうか）と帆村は不審ふしんの目をぱちくり。課長の方は（誰が赤見沢博士を病院から出したんだらうか、わが輩はいの許可を得もしないで……。何奴どいつが出したか、怪けしからん奴やつどもだ）

と、かんかんになつて、頭から汗が出て来た。

その赤見沢博士は、肘懸ひじかけいす椅子いすに凭もたれ、頭を後の壁につけていたが、その恰好がへんにぎこちなかつた。博士はまだ意識混こん沌とんとしていたので、あのような恰好をしているのであろうが、両眼を大きく明けているのが、ちと腑ふに落ちかねる。

そのときであつた。小山すみれが脚立きやたつから下りて、二本の綱

を引張つて、赤見沢博士の傍へ来た。その綱は、天井から垂れて
いた。よく見ると、天井には滑車かっしやがとりつけてあり、綱はそれ
に掛つていて、上下自在になつてゐることが分つた。

小山女史は、その綱の一本を、いきなり赤見沢博士の頸くびにぐる
ぐるつと巻きつけた。顔色一つ変えないで……。美貌びぼうの男は、あ

いかわらずにこにこ笑つてゐる。小山嬢は綱に結び目をつくると
二三歩うしろへ身を引いて、もう一方の綱をぐんぐんと下にたぐ
つた。すると博士の頸からに搦からみつゐてゐる綱がぴーンと張つた。そ
れでも小山嬢は、自分の手にある綱をぐんぐんと下にたぐつた。

博士の身体が椅子から浮きあがつた。小山嬢が綱をたぐるたびに、
博士の身体は上へ吊りあげられた。博士の絞首刑こうしゆけいである。それ

を自らの手によつて行つて行つてゐる小山すみれの顔は、始めと同じく無表情で、悔恨かいこんの色もなければ憎悪ぞうおの気も見えない。

とうとう赤見沢博士は、背広姿のまま、室内にぶら下つた。博士の足が、実験台よりもすこし高くなつたところで、小山嬢は、手にしていた綱つなを壁際の鉄格子てつこうしにしつかりと結びつけた。そして首吊り博士の下までやつて来て、美貌の男の方へ何とかいって、博士の足を指した。

田鍋課長は先刻おどろから愕おどろきの連続で、息が詰まる想おもいだつた。かねて怪しいと睨にらんでいた小山すみれが、博士の首に綱をかけてくぶり殺すところをまざまざと見せられ、全身の血は逆流した。現行犯にしても、これほど鮮かに恐ろしい現行犯を見たことは、今

まででないことだった。彼は、自分が部下の肩車に乗っていることを忘れて、窓を叩き割ろうとして、帆村に停められた。

「ちよつと、静かに……」

帆村は、室内を指した。

小山嬢は博士のズボンを手にとつて、ズボンの裾すそを持ち上げた。奇怪なことに、そのズボンには脚あしが入っていないかつた。つまりズボンだけであつた。

小山嬢は、実験台の下に躡しやがむと、間もなく台の上に大きな靴を持出した。彼女はそれを博士のズボンの下のところへ持つていつて、靴をはかせるような恰かつこう好こうを試してみせ、それから靴をまた台の上へ置いた。博士にその靴をはかせるつもりらしいが、ズボン

だけで足のない博士が、どうしてそんな重い靴をはくことが出来るだろうか、田鍋課長は気がかりであった。

小山嬢は、その靴を指して、美貌の青年の顔を見上げた。青年は肯うなずいた。小山嬢は靴の中をあけて見せた。中には何やら詰まっていた。それは何かの小型の器械であるらしく、小さい部分品が組合わせられていた。そんなものが入っているのは、靴の中に足を突込むことが出来ないではないかと、田鍋課長は更さらに気がかりになった。

小山嬢の指は敏びん捷しょうに動いて、その部分品を一々指した。彼女はそれについて説明しているらしいが言葉はさっぱり分らない。しかし帆村は、その小型器械が、無電装置であることに気がつい

た。

小山嬢は、もう一つの靴の中からも、別の器械を取出した。その器械は、著しい特徴があるので、帆村にはすぐ分った。それはほうしゃのう放射能物質から出る放射線を捕えて、その放射線の強さを検出するけいすうかん計数管の装置であつた。

（無電装置と放射線計数管と——妙なのが靴の中に収しまつてある？）と、帆村は首をひねつた。田鍋課長には、そんなことは分らないので、どうしてあんなものを靴の中に入れてあるのか、あれでは足が入るまいなどと、そんなことばかりを心配していた。

小山嬢は、靴を手になら下げた。そして指をしきりに動かして、計数管と無電装置との間に連絡のあることを示したのち、靴をい

じっていたが、靴のフックのところ突然赤い豆電球がついた。

すると、殆んど同時に、靴の底から熊手くまでのようなものがとび出して、下に向つて開いた。その恰好は、がんじきをつけた雪靴にどこか似ていた。その熊手よう様のは、蟹かにのように爪をひろげ、びくびくふる慄えていたが、そのうちにその爪がだんだん内側へ曲つて来て、遂ついには靴の下で何物かをがっちり抱きしめたような恰好となつた。

小山嬢は、そんな靴をしきりにさしあげて、美貌の青年の注意を喚起かんきしている風に見えた。すると青年は感激の面持おももちで、つと小山嬢の方に寄ると、靴もろとも両手でぐつと抱きしめた。青年の腕の下にある小山嬢の顔が、急に蒼あおくなり、それからこん

どは赤くなつた。彼女のしつかり閉じられた^{まぶた}瞼の下に大きな眼玉がごろんと動くのが見えた。彼女は恍惚境^{こうこつきよう}に入っているらしい。

青年が腕を解^といて小山嬢を離すと、彼女は靴を持ったまま傍の椅子の上へ、へたへたと崩^{くず}れるように腰をおとし、しばらくは動こうともせず、口もきかなかつた。

(無電装置と放射線計数管と浚^{しゆんせつき}漉機とを備えている靴——とは、妙な靴があつたものだ。一体この三^{さん}題^{だい}噺^{ばなし}みたいなものをどう解くべきであろうか)

帆村は、小山嬢がまだ持続する恍惚境から醒^さめやらぬのを見やりながら、心のなかにメモをとつた。

そのうちに小山嬢は、やつと正氣に戻つたと見え、靴を抱えて椅子から立上つた。

彼女はその靴の紐を、博士のズボンの下端にまきつけて縛つた。ズボンが靴をはいたように見える。

それがすむと、小山嬢は、飾椅子に結びつけてあつた綱をほどき、宙に首吊りを演じている博士の身体を下におろし、前のおり肘懸椅子に腰を掛けさせた。博士の死体は、綱を首にまきつけたまま、目をかつと剥いて、天井を見詰めている。

小山嬢は、美貌の青年に向つて手真似と共に何事かを命じた。すると青年は、くるつと後を向いた。青年の顔は、今や窓外から室内を窺う帆村と田鍋課長の方へ正面を切つた。

(あつ、そうだ、思い出したぞ。あの若僧^{わかぞう}とは、この前、R大
学研究所で会ったことがある。二百グラムのラジウムの盗難事件
が起つたあの研究所だ。たしかあの若僧は、そのラジウム保管室
の向い側の何とか研究室の助手で、彼は事件当時、怪しい女性^{あや}が
その保管室からあわてくさつて出て行くのを見たと言言したんだ。
なんとという名前だったかな。ええと、万沢と聞いたかな。……)
田鍋課長は、えらいことを思い出した。彼の胸の中は、今や沸^ふ
つ^つふ^ふと沸騰^{ふつとう}を始めた。しかし帆村はそんなことを知らない。

美しき 闖入者^{ちんにゆうしゃ}

田鍋課長の知っていることを帆村は知らず、帆村の知っていることで田鍋課長の知らぬことがあり、兩人肩を並べて窓の中を覗のぞき込んでいるところは奇観きかんだった。

後を向いて、ごそごそやっていた小山嬢が、くるりとこつちへ向き直ったと思うと、彼女の手に一疋の仔猫こねこがあつた。それをきつかけに美貌の青年も、廻れ右をして、仔猫を見ることを許された。

小山嬢は、頬ほおのあたりにいきいきとして血の色を見せながら、その仔猫を抱いて、博士の首吊り死体の傍そばへ寄つた。そして博士

の服の胸を開くと、その中へ仔猫を入れて、しばらくなくなにかごそごそやっていた。そのうちにそれが終わったと見え、彼女は博士の胸の釦ボタンをかけて身を引いた。

するとふしぎなことが起った。博士の死体が椅子からふらふらと立上ると見るや、なおそれはふわふわ上へ上って行く。博士の首にからみついている綱がだらりと下へ下る始末。そのうちに博士の死体は、頭を天井にこつんとぶつけ、天井に吸いついたようになってしまった。両脚——いや両のズボンに重い靴をくっつけたのが、ぶらんぶらんと振り運動をつづけている。

帆村は、たまりかねたように、課長の首へ手をかけて引き寄せた。

「あつ、苦しい。一度下りて下さい」

「こつちもそう願いたい」

叫んだのは帆村ではなく、帆村と課長を肩車に載せている二人の部下だった。それには構わず、帆村は課長の耳に囁いた。

「今見たでしょうね、あの仔猫を……。仔猫を博士の人形の中に入れて、あのとおりに博士の人形はふわふわと空中に浮きあがって天井に頭をつかえてしまった」

「ええツ、あれは人形か。人形だったのか」

課長は啞然として、目を天井へやる。

「田鍋さん。あの女はやっぱり猫又を隠していたんですよ。そして博士の人形を作ったり、その他へんな装置をつけたりして、

一体何をするのか、このへんで中へ踏込んだら、どうです」

「うん。しかし、もうすこし見ていよう」

「課長。一度下りて下さい、肩の骨が折れそうだから」

「これ大きな声を出すな。家の中へ聞えるじゃないか」

上と下との掛け合いが、だんだん尖鋭化して来た折しも、思いがけないことが、室内に於て起つた。

というのは、突然に——全く突然に、どこからとび出したのか、一人の若い女人にょにんが、部屋の隅に現われた。彼女の手にはピストルが握られていた。ピストルは小山すみれと美貌の青年とに交互こうごに向けられている。

美貌の青年が両手をあげた。小山嬢もそのあとから、しなびた

両手をあげた。小山嬢は額ひたいに青筋をたてて憤慨ふんがいの面持おももちで突然
ちんにゆう 闖入したる背の高い美女を睨にらみつけている。美貌の青年は、
 にやりと笑っている。

美女は、しずかに歩を運はこんで、博士の人形を結ゆわえている綱に、
 空いている方の手をかけた。彼女はその綱をひいて、博士の人形
 を室外に持出す様子を示した。

そのとき、美女はわずかの隙すきを作った。

と、実験台の下の腰掛が、風を剪きって美女の胸のあたりを襲おそつ
 た。が、それは美女が咄嗟とつさに身をかわしたので、うしろの扉にあ
 たって、扉を開いただけに終わった。

ズドン。

銃声とどろが轟く。硝子ガラスの壊れる音こわ。悲鳴ひめい。途端とたんに又もや腰掛がぶうんと呻うなりを生じて美女の顔を目懸めがけて飛ぶ。これは美貌の男の防禦手段だった。——が、このときどこからともなく煙がふきだし
たと思つたら、カーテンが一瞬いつしゆんに焰ほのおと化した。めらめらぱち
ぱちと、すごい火勢かせいに、研究室はたちまち火焰かえん地獄じごくとなり、煙の
なかに逃げまどう人の形があつたが、その後のことは、帆村も田
鍋課長も見極みきわめることが出来なかつた。突然窓から吹きだした紅ぐ
蓮れんの炎に、肩車担当の二警官はびっくり仰ぎようてん天、へたへたとそ
の場に尻餅しりもちをついたからである。帆村と課長は、弾はずみをくらつ
て大きく投げだされ、腰骨をいやというほど打つて、しばらくは
起上ることが出来なかつた。

そのうち火勢はずんずん^{ひろ}拡がって、赤見沢博士のラボラトリーはすっかり火に包まれてしまい、手のつけようもなくなつたが、それは研究室内にあつた油と薬品が、このように火勢を急に強めたものに違いなかつた。

課長が帆村たちと共に再び立上り、燃える建物をいくたびもぐるぐる廻つて警戒につとめると共に、機会があれば、中へとびこんで何か目ぼしい品物を取り出そうとあせつたけれど、遂に^{つい}研究室の方には入ることが出来なかつた。そしてかの美貌の男か、美女か、小山すみれかに行逢^{ゆきあ}えば、直ちに補えるつもりでいたけれど、結局この重要な三人の人物を^{むな}空しく逸^{いっ}してしまつた。

駆^かけつけた消防隊の手で、完全に火が消されると、間もなく^{あかつき}暁

が来た。

課長は、焼跡を丹念たんねんに調べた。

その結果、一箇いっかんの無残むざんな焼死体が発見せられた。背骨からしてすぐ判定がついて、犠牲者ぎせいしやは気の毒な研究生小山すみれであることが分った。しかし美貌の男も美女も、現場に骨を残していなかった。

また仔猫の骨もなかった。帆村がさつき異常なる興味を覚えた妙な器具の入っている靴も、焼跡の灰の中には見当らなかつた。

この博士邸ていの火が消えた後で、田鍋課長と帆村莊六とは、焼跡に立って、意見の交換をした。互いに知っている事実を語り合つた結果、

「田鍋さん。これは面白くなりましたよ。化け靴事件と、ラジウム盗難事件との間に密接な関係があるということが分つて来たじやありませんか」

と、帆村がいえば、田鍋課長は、

「どうもそういうことらしいね。しかしラジウムとお化け靴と、どういふつながりになっているか見当がつかんが、君は何か思いあたることがあるかね」

「そのことだが、僕の考えでは、あの盗難とうなんに遭あつたラジウムは、今どこか知らんが、兎とに角かくちよつと手の届かない場所にあるんだと思うんですね。それでさ、あの万沢まんざわとかいう男が小山すみれ嬢そそのを唆そかして、仔猫利用つりあの吊上げ装置を作らせたんだと解かい釈しやく

する」

「どうしてそうなるのかね」

「博士の人形も焼けちまい、すみれさんも焼け死んだので、はつきりしたことは分らないけれど、あの博士の人形は猫又の浮力——というか重力消去装置の力というか、それを利用して浮き上る力を持たせてある。靴に仕掛けた放射線計数管は、ラジウムの在^ありか所を探すための装置だ。無電の機械は、計数管に現われる放射線の強さを放送する。それからもう一つ、あの人形には電波を受けて、靴の下に仕掛けてある浚^{しゅん}漑^{せつ}機^{つき}みたいな、何でもごつそりさらい込む装置——あの装置を動かせるようになってるんだと思う。つまり電波による操^{そう}縦^{じゆう}で浚^{しゅん}漑^{せつ}機^{つき}を動かすんだ。これだけ

のものを、あの人形は持っていたと思う」

「そんなものを、どうする気かな」

「そこでだ、悪漢あつかん一味は、あれを持ち出して人形を歩かせ、計数管の力を借りて、ラジウムの在所を確かめる。

人形がちょうどラジウム二百瓦ゲラムの容器の上に来たとき、放射線の強さは最大となるから、そのとき悪漢一味は電波を出して、あの靴の下に仕掛けた浚渫機を働かせる。つまりごっそりと、ラジウムの容器を、あの浚渫機の爪つめの間にさらえ込むのさ」

「ふうん、なるほど」

「それからこんどは、例の猫又の力を借りて、人形ごとずっと上へ浮き上らせるわけなんだが、僕にも分らないのは、重力消去装

置の力を借りる必要のあるラジウムの隠し場所とは一体どこなんだか、見当がつかないんだ」

「はてな、一体どこなんだかね。そういうへんな人形の力を借りなければ取出不い場所というところ……」

田鍋課長にも、全く見当がつかなかった。

つばき
椿の咲く島

椿の花咲く大島の岡田村の灯台とうだいのわきにある一本の大きな松

の木の梢こぎすえに、赤革のトランクがひっかかっていた。

それを発見したのは、早起きをして崖がけつぷちで遊んでいた官かんし舎やの子供たちだった。それからみんなに知れわたって、騒ぎは

絶ぜつちよう頂ていに達した。

「誰があんな高いところまで登って、靴をくくりつけでいったらう。不審ふしんなことだ」

まことに不審ふしんの至いたりであった。それを探たん究きゆうすべく、灯台の職員で、身の軽い瀬戸さんという中年の人と、その配下はいかの平木君という青年とが、身を挺ていしてその松の木をよじ登って行った。

両人は松の枝にひっかかっている靴を、枝から取外とりはずすと、把柄なわに縄をしばりつけて、靴を下へぶら下げて下ろした。下に集つ

ていた連中はその鞆が下りてくるのを興味ぶかく見守っていた。その鞆の中から、赤い紐ひもが二本ぶらぶらと垂たれているのが、甚きだき妙みょうであつたのと、その鞆が地面へつくと同時に、あたりが急にへんに臭くさくなつたことが特記せらるべきだつた。

松の木をよじ登つた兩人も下りて来て、その鞆が半分は自分たちのもののような顔で鞆のそばへ近づいたが、その臭しゅう気うきには顔をしかめずにはいられなかつた。

「瀬戸さん。えらいものを下ろして来たな」

「なんじやろうかなあ、この臭いのは……」

「その鞆の中が怪しいなあ。へんなものが入っているんじゃないよ。」

女の生なまくび首くびかなんかがよ」

「嚇おどかしつこなしよ」

「靴から出ている赤い紐なな。それは若い女の腰紐じやぞ。その腰紐なが、先が裂さけて切れきれているわ。それにさ、紐なの先さきのところところが赤黒くろく染そまつてまいるが、血ちがこびりびりついてまいるんじやないのかい」

書記しきの青木あおきが、とがとつた口くち吻くちから、気味きみのわるい言葉ことばを次々つぎつぎに吐はいた。立合たちあいの衆しゆうは、いいあわせたように二三歩ふた後ごへ下くだつた。
「よおし、何なにが入いつてまいるか、一つ靴くつをあけてくれよう」

「よしなよ、気味きみが悪い。海うみへ捨すてちまいな」

瀬戸せとの妻君つまがいった。

「靴くつをあけてから捨すてても遅おそくはないだろう。もし紙幣きつが百万円ひゃくまんえんも入いつてまいてまいな、わしらの大損だいそんだよ」

「ははは、慾が深いよ、工長こうちようさんは……」

その鞆が簡単にあかなかつた。鞆の金具がどうかしているらしかった。そのうちにも臭気はいよいよぷんぷんとたまらなく人々の鼻を刺戟しげきしたので、立合いの衆は気が短かくなり、とうとう斧おのを持ち出して、鞆の金具を叩たたき斬きった。

鞆はぱくりと開いた。みんなはわれ勝ちに中をのぞきこんだ。顔をしかめる者、ぺっぺつと唾つばを吐く者。中には仔猫の死骸しがいが入っていた。それと赤い紐が一本……。

靴の先と棍棒こんぼうとで、鞆は崖がけを越して海へ。

その鞆は、執しゅう念ねん深いというのか、海上を漂ただよううちに海岸へ漂ひよう着ちやくした。元村もとむらの棧橋さんぼしのすぐそばであった。

警官が聞きこんで、その靴をけんぶん検分に来た。彼は東京からの指れい令を憶おぼえていたので、早速さつそく「それらしきもの漂着す」と無電を打った。

折返し、新しい指令が来た。警官たちは忙しくなった。旅館は一軒のこらず臨りんけん検をうけた。

その結果、目賀野が見つかつて、飛行機で到着したばかりの田鍋課長の前へ呼び出された。

目賀野は、その靴と無関係であることを主張した。いわんや殺人事件などは思いもよらないと抗こうべん弁した。

三日間、のべつに取とりしらべ調がつづけられ、目賀野が陳ちんじゆつ述した重要事項は、次のようなことであった。

「別に悪いことをした覚えはありません。君も知っているとおおり、昔からわしは曲ったことは大嫌いだ。……しかし、ちよつと慾よくの気は出した。例のラジウム二百瓦グラムの入った鉄の箱が、この三原山の噴火口ふんかこうの中に投げこんであるど耳にしたもんだから、なんとかそれを取り出そうと思つてね。いや、取出せばその筋すじへ届けるつもりだつた、本当です。しかし世間を呀あつといわせたかつた。そこで思いついたのが、赤見沢博士の研究だ。重力消去の実験に成功していることをわしは知つていたので、博士にそれを使つた一種の起重機きじゆうきの製作を依頼したのです。そのトランクは、すなわちその品物だつたかもしれない。いや、その種の試作品だつたかもしれない。要するにその装置を噴火口の中へ投げ入れておくと、

火口底かこうていにおいて巧みたくにラジウムの入った鉄函てつぽこを吸いつけ、あとは重力消去によつて噴火口をのぼり、上へ現われ、わが手に入るといふ計画だつた。生なまの人間じゃ、とても火口底へは下りられないんでね。……が、その博士がわしのところへ来てくれる約束の日に、途中であの事件に遭あつて、あんなことになるわ、そばにあつたトランクは、早いところ何者かによつて掬すりかえられていたので、わしはすっかり失敗してしまつた。たつたこれだけのことで、すこしも怪しい点はない。元村へ来て泊つていたのも、別な手段でラジウムを取出す方法を研究に来たわけで、あのトランクには関係がないです。これはよく分つてもらわにや大迷惑おおめいわくだ。……白井はどこへ行つたか知らん。船に乗つていたが、その

後脱走したそうで、わしは知らん」

この陳述によつて、あらまし筋は分つて来たようである。

つまるところ、目賀野は本事件の主役ではなく、その傍系ぼうけいのドンキホーテ染じみたところのある人物に過ぎないのだ。

「例のラジウム二百瓦が三原山の噴火口に投げこんであることは、いつ誰から訊きいたか」

課長は、最も重大なところを突つ込こんだ。

「そのことかね。それはあの臼井が、いつだったか、密書みつしょを拾つたんだ。その密書に簡単ながら、そういう意味のことが書いてあった。その密書は臼井が持っている。わしではない」

「その密書の差出さしだし人は誰か。また受取人は誰なのか」

「名前ははつきり書いてなかった。ただ、差出人の名前に相当するところには、矢を二つぶつちがえた印が捺してあつた」

「矢を二本ぶつちがえた印が、ふうん。そして受取人の方には：
…」

「受取人の名前に相当する場所には、三本足の黒い鳥の絵が書いてあつた」

「何という、三本足の黒い鳥の絵が？」

と、課長は驚愕きょうがくの色を隠かくしもせずに叫おどろんだ。

「どうした課長。鳥の絵になぜそんなに愕おどろくのか。一体それは誰のことなんだ」

目賀野はいい気になって反問はんもんした。

「それは恐るべき賊のしるしだ。烏啼天駆という怪賊があるが知
つているかね」

「ああ、怪賊烏啼か。烏啼のことなら聞いたことがあるが、若い
くせに神しんしゆつきぼつ出鬼没の悪漢だつてね。一体どんな顔をしているの
かな、その烏啼というやつは……」

「それがよく分らない。烏啼と名乗る彼に会った者は誰もない。
しかし脅きようはくじよう迫状などで、烏啼天駆の名は誰にも知れ互わたつてい
る」

「捜査課長ともあろう者が、そんなぼやぼやしたことで、御用が
勤つとまると思うのか」

「何をいう。いい気になって……」

課長は目賀野を元の留置場へ戻した。

怪賊烏啼

そのあとで課長は溜息ばかりついていた。この二つの事件に、怪賊烏啼天駆が関係しているとは、目賀野の話で始めて分った。そうなると、これはますます事が面倒になつてくる。ありとあらゆる検察力を發揮しないと、烏啼を引捕えることは出来ない。しかし、一体どこから手をつけていいか、分別がつかない。こ

ういうとときに帆村が居てくれれば、どんなに力になってくれるかわからない。が、彼にはこの事を知らせずに、この大島へ来てしまったことが後悔こうかいされた。

だが、その帆村が、ひよつくりと課長の前に現われたもんだから、田鍋はおどろき且かつよろこんだ。彼は早速さつそく、この事件に烏啼天駆が関係していることを帆村に語って、帆村の助力をもとめた。

「それはいいことが分ったもんです。いや実は、僕が今日飛行機でここへ飛んで来たのは、本庁からの依頼で、あなたに手紙を持って来たのです。さあ、これを読んで下さい」

と、帆村は内ポケットから手紙を出して、課長に渡した。それ

は課長の次席にいる主任の芥川あくたがわ警部からのものだった。手紙の内容は、これまた愕おどろきの一つだった。

「えっ、赤見沢博士が昏睡こんすい状態じょうたいから覚さめたというか。そして君は博士に会って話をして来たって？」

「そうなんです。その結果、いろいろと分つて来ましたよ。第一に、博士はあの晩、只ただの靴の中に、例のお化け靴——つまり重力消去装置の仕掛けてある立派な把柄のついている靴を入れて、電車に乗ったんだそうです。決して角材かくざいや古新聞紙は入れなかつたといひます。つまり賊は、博士の靴とそっくりの靴を用意し、その中に角材を入れて、二重靴と同じ位の重量とし、博士の靴と掬すりかえるつもりだったらしい。博士は言明げんめいしていません、自分

が座席に座っていると、よく似た鞆を持った乗客が近寄つて来て、博士の前に立つたそうです」

「そやつが怪しい！」

「そうです。誰が聞いても怪しい奴ですが、そのとき博士は大いに要慎して、自分の持つている鞆を奪われまいとして、一生懸命抱えこんだそうです。すると怪しい乗客の連れである若い女が博士の方へ身体をおつかぶせるようにのしかかって来て、女の膝が博士の膝を強く押した、すると急に博士は気が遠くなつてしまつたんだそうです」

「どうしたのだろう」

「女の膝から博士の膝へ、或る麻薬の注射が施されたんでしよう

ね。博士は、そういうえびちくりとしたようだといっています。——それから博士は、意識の朦朧たる裡にも、膝の間に挟んでいた鞆が掬りかえられるのに気がついたそうです。しかし声を出そうにも手をあげようにも、どうにもならなかつたそうです。そしてそのうちに何もかも分らなくなつた……」

「怪しい奴は、すると男と女と二人組なんだね」

「そうなんです。これが頗る重大な事柄なんですが、田鍋さん、博士はその男女の顔をよく覚えていて、人相を話してくれましたが、男も女もなかなか目鼻の整つた美しい人物だつたといひますよ」

「えつ、何という。美男美女だつて？」

「正に美男美女なんです。そしてそれがですよ、ほら博士邸が焼けた晩ね、あの晩に研究室にいて小山すみれを相手にしていた若い美貌の男——万沢とかいいましたね——あの男とそれから後にピストルを持って現われた美人がありましたね、あの女と、このりようにん両人らしいのですよ」

「ふーん、そうか」

田鍋課長は、満面を朱しゅぼん盆のようにあか赭くして、膝を叩いて呻うなつた。

「ね、課長さん。さつきあなたから伺うかがった話から誘ゆうどう導すると、その美貌の男こそ、烏啼うていてんく天駆でなければならぬと思うんですが、課長さんの意見は如何ですか」

帆村は、大胆なことをいった。

「そうかもしれない。いや、それに違いない。あれが烏啼なら、あるとき逃がすんじゃないやなかった。で、女は何者か」

「それが分らないのです。しかしですよ、この事件の主軸しゅじくには、二つの者が功を争っていることは、僕も察していました。例えばあの紛失靴の新聞広告のことですね。

あの広告主の一人は烏啼天駆であり、もう一人はやっぱりあの女だったんですよ」

「ふうん、なるほど、そういえばそうかもしれない」

「あの二人は、時に一緒になつて働きました。その例は、博士から靴を奪うばったときなんかがそれです。それでいて、二人は大いに

睨にらみ合あつていたんですね。だから博士邸のピストルさわぎも起つた。あれはお化け鞆そそが紛失したのに困った烏啼そそが、小山すみれを唆そそのかして、猫又を利用した新規の起重装置をこしらえるように頼んだ。それが完成したので、持って帰ろうとしたところを、例の女が嗅かぎつけて、暴あばれこんだという訳はなんでしょう」

「そうだ、それに違ちがいがない。するとわが輩はも大迂だい回かいをやつていたわけだ。ちえッ、いまましい」

天てん罰ばつ下つる

事件は、そこまでは解けた。

当局は警戒網を三原山のまわりに嚴重に固めめぐらした。

その一方、大学に懇請して、火口底に果してラジウム二百グラムが投げこまれてあるのかどうかを検べて貰った。これは案外苦もなく分つた。たしかにラジウムは火口底の南寄りの岩の間にあることが確認された。

しかし、そのラジウムを取出す方法はちよつと簡単には出来そうもないことが分り、当局は未だに警戒の陣をゆるめないで番をしている。なにしろその後、烏啼の消息がさつぱり分らないので、油断はならないとのことであつた。

帆村はもうラジウム事件には、大した興味を持っていない。しかし田鍋課長が、彼に自慢らしく語ったところでは、烏啼はあのR大学の研究所のラジウム保管室の向いの研究室の助手に化けこんでいて、あのラジウムを巧みに盗み出した。それから彼は、かねて連絡をつけてあつた看護婦の秋草に渡した。秋草はそれを持って出て、某飛行場へ急行し、烏啼の一味である矢走という男をして、その品物を飛行機でもって三原山の噴火口に投げおとさせたと認める。例の美男美女というのは、この烏啼と秋草らしいといわれる。研究所の同僚たりし人々は、確かに彼ら二人を、美男美女と認めているから、間違いないと、田鍋課長はいささか得意で、椅子の背にふん反りかえった。

帆村の興味は、そんなことよりも、大島の松の木にひっかかっていたお化け靴と猫又の死骸と血染ちぞめの細紐ほそひもが、何を語っているか、それを解くことに懸かつていた。

その年の春、ひどい海底地震が相模湾さがみわんの沖合おきあいに起り、引続いて大海嘯おおつなみが一带の海岸を襲った。多数の船舶が難破なんぱしたが、その中の一隻に奇竜丸きりゅうまるという二百トンばかりの船があつて、これは大島の海岸にうちあげられ、大破たいはした。また乗組員の半数が死傷した。

この奇竜丸の救援に赴おもむいた官憲は、はからずも、この船の構造や、乗組員の様子に疑惑ぎわくを持ち、嚴重に取調べた結果、この船こそ怪賊うていてんく烏啼天駆の持ち船だと分り、そして天罰てんばつとはいえ重傷を

負っている烏啼を、遂に他愛なく引捕えた。

このことは早速東京へ無電で連絡され、田鍋課長は再びこの大島へ急行して、烏啼を受取った。

烏啼はもう観念したものと見え、すべてをべらべらと喋った。

彼の行動は、大体帆村の推理したところに一致していた。しかし烏啼がその後秋草と争って、遂に猫又もお化け鞆も共に自分の手に入れ、それを奇竜丸に持ち込んだばかりか、秋草の自由を束縛してこの船に乗せてしまったことが分った。それから後はずっと海上生活をしてきたものだから、この二人の行方は陸上を監視していただけでは知れなかつた筈である。

その烏啼は、海上生活を送りながら、なんとかして大島へ上陸

し、三原山の火口底から例のラジウムを取出そうと、機会の来るのを狙つていたが、当局の警戒がすこぶる嚴重なため、その目的を達することが出来ないでいた。

ところが或る日、秋草が実に大胆なる脱走を試みた。

彼女は、烏啼の部下数名を、巧みなる手段によつて籠絡する

と、その力を借りて、猫又とお化け靴とを盗み出させ、それから

細紐ほそひもで自分の手首をしぼつて、猫又を入れたお化け靴に結びつ

け、靴の把柄を下へ押し下げた。すると猫又の浮力ふりよくと、お化け

靴の浮力とによつて、靴は秋草の身体を下にぶら下げたまま宙に

浮きあがった。船は依然として走っているものだから、靴にぶら

下つた秋草の身体は見る見るうちに船を離れた。

これに気がついた乗組員が、急いで烏啼に知らせたので、烏啼は顔色をかえて船橋せんきようへ上った。そして秋草の身体の流れていったと思う方向へ船を戻した。

だが、折柄おりから空に月はあれど夜のことだから、遂ついににそれを発見することが出来なかつたという。

この烏啼の告白によつて、猫又の死骸とお化け鞆と血染めの紐の謎よが漸ようやく解けそめた。そのようにして秋草は脱走をはかつたが、彼女はぐんぐん上空へ引き上げられて息が絶たえたものと思う。そのうちに彼女の身体を吊つり下げている紐が切れ、下へ落ちてしまつたのであろう。恐おそらくそれは広い海の中であつたことと思われ

る。彼女の纖細せんさいなる手首が紐でこすられて血が出、それが紐の

切れ端に残ったことは確かだ。こうして彼女は、遂に敗れて一いちめ命を失ったものらしい。

臼井は今も行方が知れない。

それから最後に特筆大書とくひつたしよしておくべきは、田鍋課長が目賀

野を証人として、烏啼に会わせるところ、目賀野がびつくりして烏啼を指して叫んだ。

「やツ、貴様は千田じゃないか」

烏啼は、繻帶ほうたいを巻いた頭をすこし起こして、ふふんと笑った。

「貴様が千田なら、おい話せ、わしの姪めいの草枝はどこへ連れていった」

千田と草枝が一組となつて、いつも目賀野の下で働いていたこ

とは、ずっと前から知られている。

「おれは知らんよ。課長に願つて、細紐に残っているあの女の血に尋ねてみたがよかろう」

と、烏啼はいつて、むこうを向いてしまった。

そんなことから、目賀野の姪の草枝こそ、看護婦秋草のことであり、彼女が或るときは烏啼に協力しながら、後には烏啼と張合つてラジウムやお化け靴やお化け猫の争奪に生命を賭けたことが判明した。

これで、靴らしくない靴の話は、すべて終つたわけであるが、気の毒なのは赤見沢博士である。博士は研究所を火災で失つて、どうにも復興の見込みが立たず、あたら英才を抱いて不幸を

歎^{たん}しているという。しかし博士のことだから、そのうちにもっと何かいい手段を考え出すことだろう。博士が、この次に、重力消去装置をどんな方面に活用するかは、非常に興味あることだと思う。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日初版発行

※「深夜の研究室」において、小山嬢が綱を結びつけたところは、「壁際の鉄格子」と「飾椅子」の二つが示してある。矛盾しているが、底本のママとし、本文中には注記しなかった。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年7月21日公開

2006年7月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鞆らしくない鞆

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>